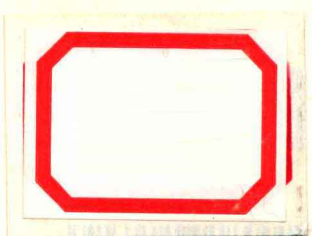


ISBN4-89476-171-8

C3081 ¥1800E

定価 1800円+税



1923081018001



「そ」と「ん」

江苏工业学院图书馆
藏书章

言語学

定延利之 編



HITUZISYOBO
T O K Y O

「うん」と「そう」の言語学

発行

2002年11月7日 初版1刷

定価

1800円＋税

編者

◎定延利之

発行者

松本 功

カバーデザイン

家永京子(ae)

印刷所・製本所

三美印刷株式会社

発行所

有限会社 ひつじ書房

〒112-0002 東京都文京区小石川5-25-8 1F

Tel. 03-5684-6871 Fax. 03-5684-6872

郵便振替00120-8-142852

toiawase@hituzi.co.jp

<http://www.hituzi.co.jp>

造本には充分注意しておりますが、落丁・乱丁などがございましたら、

小社かお買上げ書店にておとりかえいたします。

ご意見、ご感想など、小社までお寄せ下されば幸いです。

ISBN4-89476-171-8 C3081

目次

序（定延利之）	1
会話の中の「うん」と「そう」—話者性の交渉との関わりで—（串田秀也）...	5
中国語の肯定応答表現—日本語と比較しながら—（黄麗華）	47
“是吗?” に関する覚え書（井上優）	61
「うん」と「そう」に意味はあるか（定延利之）	75
プロソディからみた「うん」と「そう」（坊農真弓）	113
「はい」と「うん」の関係をめぐって（富樫純一）	127

序

定延利之

この論文集は、関西言語学会第26回大会（2001年10月27日、於龍谷大学）のワークショップ「デキゴトとしての文」で発表された4編の論文（串田論文・黄論文・坊農論文・拙論）の改訂版に、2編の論文（井上論文・富樫論文）を新しく加えたものである。ワークショップ直後にひつじ書房から出版のお話を頂き、約一年の準備期間を経て論文集の形にまとめることができた。ワークショップの司会をつとめた者として、まず、このような機会を与えてくださった学会事務局とひつじ書房松本功社長にお礼申し上げたい。

「デキゴトとしての」という表現は、もちろん「記号としての」という対立項を意識したものである。周知のとおり、言語学をとりまく状況はいろいろな意味で年々きびしくなっている。原因の一つは、言語学が閉鎖的な記号システムの解明に拘泥するあまり、その成果が隣接領域から見えず、利用できないということである。言語学が生き延びていくには、隣接領域との結びつきを積極的にはかっていく必要がある。以上の認識のもと、このワークショップそして論文集では、「うん」と「そう」という現代日本語会話に頻出する表現を合い言葉として、言語学と隣接領域との接点をさぐった。

まず隣接領域について説明しておこう。われわれは会話分析という隣接領域から、串田秀也氏という願ってもないゲストを迎えることができた。串田氏は会話分析の領域で最先端に位置する人物だが、今回はデータの面でも、立論の面でも、言語学者のために最大限の譲歩をしてくださった。串田氏の貢献なしには、ワークショップも論文集もあり得なかっただろう。串田論文では、会話における話者性の交渉の中で、「うん」と「そう」がどのように発し分けられるかがきわめて明確に論じられている。

串田氏とからむ言語学サイドの陣容を考える際、私には2つの選択肢があった。1つは、欧米で進展し、日本でも活発化しつつある「会話のための文法」の研究者たちに声をかけるという道であり、もう1つは「伝統的な言語学」の研究者たちに声をかけるという道である。もちろん会話分析とよくなじむのは「会話のための文法」の方だが、私は結局「伝統的な言語学」を選んだ。いま問題になっているのは、「伝統的な言語学」の研究成果が隣接領域から見えないということだからである。「会話のための文法」がいくら会話分析とむすびついて、それで「伝統的な言語学」が救われるわけではない。「会話のための文法」は「伝統的な言語学」の多くの前提を廃棄しており、見方によっては「伝統的な言語学」と鋭く対立しているのである。たとえば「会話のための文法」の立場からは、「伝統的な言語学」は現実の会話データを扱わず、現実の会話データから切り離された形で言語表現を論じるので無効だという趣旨の批判がしばしばなされる（たとえばウィリアム・クロフトを批判したポール・ホッパーの論文"The category 'event' in natural discourse and logic"を参照されたい）。この種の批判が本当に完全に正しいのかどうか見極めたいという思いも、実は私にはあった。そこで、現実の会話データを扱っておらず、しかしそれにもかかわらずすぐれた成果を挙げていると思われる「伝統的な言語学者」、具体的には黄麗華氏と井上優氏を中心とした陣容を考え、「うん」「そう」や関連表現を論じていただいた。

黄氏と井上氏についてまず言えることは、ともに言語対照という手法の使い手だということである。一般には「言語を対照するには対照される言語すべてに精通していなければならない」といった考えが悪い方向に働いて、なかなか言語対照にふみだせないことが多いが、言語対照は一言語のデータだけでは見えてこない事実を浮かび上がらせるための単なる手法であって、あまり敷居の高いものと考えず積極的に活用すべきだ、というのが両氏のかねてからの持論である。黄論文では中国語の肯定応答表現"ng"・"dui"・"shi"・"duile"・"shide"の使い分けが日本語「はい」「ええ」「うん」「そうです」との対照の中で、井上論文では中国語"shima"の意味用法が日本語「そう（なん）ですか」との対照の中で論じられている。いずれも論の中心は中国語表現だが、ここで展開されている記述は、日本語「うん」「そう」の用法説明を精練する上でも有益だと思う。

黄氏と井上氏のもう一つの共通点は、情報処理的な観点、つまり話し手を情報

処理者としてとらえ、言語表現の意味用法を論じる際に話し手心内の情報処理を持ち出すという点である。たとえば、黄論文で"ng"が話し手内部での「情報調整」と結びつけられており、井上論文で"shima"と「そう（なん）ですか」の違いが「新規情報との接触→知識状態の整理→新規情報受容」という情報処理の流れの中で位置づけられていることは、まさしく情報処理的な観点の現れと言える。情報処理的な観点を色濃く持った「伝統的な言語学」としてはヴァン・ダイエや田窪行則氏、金水敏氏の研究がよく知られているが、論文集では、この方向をさらに押し進めようとする富樫純一氏にも「はい」と「うん」を論じてもらうことができた。富樫論文では、「はい」「うん」の本質が話し手心内の情報処理の標識であるという主張のもと、情報の心内活性化に関するチェイフの研究が援用され、「はい」「うん」の使い分けが、活性化された情報に付随する半活性情報の呼び出し操作の違いに対応するという興味深い論が展開されている。

黄氏と井上氏の、忘れてはならない第3の共通点は、語句や文の自然さを、多様な状況設定のもとで論じるという手法である。この手法は黄論文や井上論文だけでなく、富樫論文、そして拙論にも共通している。拙論では「伝統的な言語学」の立場から「うん」「そう」のさまざまな用法が音調も含めて細かく論じられている。音調に関しては、機器を用いての測定というところまで行くべきだったが、今回はすべて坊農真弓氏におまかせした。坊農論文は「そう」が意味を持った語（記号）らしく、「うん」が語らしくないことを、（上昇調イントネーションという部分的なものだが）音調観察を通じて論じたものである。

もちろん、状況設定には恣意性がつきものかもしれないし、特に「うん」「そう」のようなほとんど無自覚に発せられることも多い語句の場合、内省にたよる判断は危険かもしれない。しかし、さまざまな状況ごとの語句や文の発話データを、現実のデータからそろえることはまずできない。たとえそうできたとしても「これこれこういう状況のもとでは、この表現はしない」という負の観察を得ることはむずかしい。完全無欠な言語研究法というものがおそらく存在しない以上、現実のデータから出発するのも一つの手法、架空の状況設定から出発するのもまた一つの手法、言語対照も情報処理的な説明も、音声分析も一つの手法と認め、お互い補い合っていくしかないのではないか。ようやく串田論文との接点が見えてきた気がしているが、これが正しいかどうかは読者のご判断におまかせしたい。

会話の中の「うん」と「そう」

— 話者性の交渉との関わりで —

串田秀也

はじめに

日本語話者のくだけた会話において、「うん」と「そう」はもっとも頻繁に用いられる言葉のうちの二つであろう。数えたことはないが、どちらもベスト10に入るのではなかろうか。これら二つの言葉は、日本語話者がコミュニケーションを行うとききわめて使い勝手のいい、便利な道具だといえることができる。これらの道具を持つことによって、日本語話者はどのようなコミュニケーション上の活動が可能となっているのだろうか。本章では、実際の会話に見られた「うん」と「そう」を会話分析の立場から分析し、そこから一組の仮説を提出する。

ただし、会話の中に現れるすべての「うん」や「そう」の用法を統一的に説明することは、本章の範囲を超える。ここでは、ある限定された会話文脈において「うん」と「そう」が系統的なオールドターナティブとして用いられていることに注目する。それは「引き取り」と呼びうるやりとりの形式が生じたあと、という会話文脈である。「うん」と「そう」は、どちらもこの会話文脈において頻繁に用いられるが、それぞれの場合に、前後で行われている発話には一連の識別可能な特徴がある。本章ではまず、これらの識別可能な特徴をひとつひとつ調べることによって、この会話文脈における大多数の「うん」と「そう」の用法を説明できる一組の仮説を提出する。次いで、これらの仮説に一見反するように見える少数のケースに言及しながら、仮説の有効性をさらに検討する。最後に、この仮説の含意を考察する中で、仮説がここで直接調べた会話文脈を超えた射程を持つと考えられることを論じる。

以上の作業を通じて私は同時に、本書の主たる読者だと想定される言語学者に向けて、社会学を出自とする会話分析の分析手順を、できるだけわかりやすく提示するよう努めたいと思う。言語学において語用論的研究はしばしば「くずかご」

に例えられてきた。この伝でいけば、本章のような分析は「重箱の隅」ならぬ「くずかごの隅をつつく」ものといえるかもしれない。しかしながら、定延が指摘したように（定延(2000)）、周辺の現象に注目することは既存の枠組みの限界を超えたより深い理解に達する可能性を開く。会話分析が注目する現象の多くは言語学にとって周辺の現象であるだろうが、だからこそ会話分析と言語学との対話は、言語の研究が「言葉話す動物」としての人間のトータルな理解に貢献しようとするとき、重要なことであると思う。

1. 引き取りと話者性のゆらぎ

この分析は、当初から「うん」と「そう」の用法を解明することを目的に着手されたものではない。「うん」と「そう」に焦点を当てることになったのは、探究の途上でいわば副産物である。私は、日本語話者の会話においてしばしば現れる「引き取り」というやりとりのパターンに興味を持ち、それがどのような場合に生じるのか、また、そのパターンが生じたとき会話はどのように方向づけられるのか、という問題に関心を持っていた¹⁾。この探究の過程で、「引き取り」の直後に系統的な形で「うん」と「そう」が現れることを見いだした。そこでまず、この「引き取り」という現象について必要最小限の説明を行うことから始めたい。

言語学者や言語哲学者が言葉の用法について考えるとき、「文」という統語的単位が分析の前提とされるのがふつうである。ひとつの文を超えた「談話」について考察が行われる場合にも、それは「文がいくつか連なったもの」であることが前提とされる。またたいていの場合、「文は一人の話者（書き手）が産出する」「文の構造は話者（書き手）の意図・計画と統語的規則によって決定される」などのことが、前提とされていると思われる。

しかし、実際の会話を記録して分析している会話分析研究者にとって、以上のことはアプリオリに分析の前提にできるものではない。それを端的に示す現象のひとつとして「引き取り」がある。まず、次の会話断片を見ていただきたい。

【来る直前だもんね】

〔3人の大学生がビデオを見ながら会話している。ビデオ画面には、数ヶ月前のBの部屋が映し出されている。Bはこの間に、部屋の模様替えをして部屋の中に幕を張っており、ビデオ画面の中のBの部屋にはまだ幕がないことが話題となっている。〕

1A: は——(.)張る前やこれ

→ 2B: そうだって(.)あたしあれやったのさー(0.6)

⇒ 3A: 来る直前だもんね

4B: そうそうそう(0.7)このー(0.7)あと(0.4)ぐらい?

5A: うん

Bが「あたしあれやったのさー」といって少し間を空けたあと、Aが「来る直前だもんね」と統語的に連続する発話を行っている。これによって、結果的に、BとAは二人でひとつの文を作りだしている。このように、一人が産出し始めた文を完了しうる統語的要素が現れる前に、もう一人がそこまでの発話と統語的に連続する形で次の発話を行うというやりとりのパターンを「引き取り」と総称しよう²⁾。また、最初に文を産出し始めた方の会話者を「引き取られ手」と呼び、統語的に連続する発話を行った者を「引き取り手」と呼ぶことにしよう。(本章で提示する会話断片では、すべて「引き取られ手」を「B」、「引き取り手」を「A」と表記する。また、「引き取られた発話」のある行を「→」、「引き取り発話」のある行を「⇒」で示し、統語的連続性が分かりやすいように該当部分は太字で示す。その他の記号については、本章末尾を参照。)

上の断片においては、Aが「来る直前だもんね」と続きを発話しているときBは何も発話しておらず、クリアな形でAの引き取り発話が行われている。しかし、引き取りが行われるときに、引き取られ手の方も継続して自ら発話を行う場合もある。この場合には、次のようなオーバーラップした引き取りが生じる。以下では、これら両方の場合を分析の対象とする。

【食べちゃったねー】

〔親族の食事場で、Bの2歳の子どもがお皿のトマトを全部食べてしまったことが話題となっている。〕

→ 5B: **結局このトマトほとんど**(0.4) 「食べたねー」
「食べちゃったねー」 「うん(0.7)」
「—」

⇒ 6A:

7B: まるまる

二つの断片では、ここで産出された文に関して、その話し手はBとAの二人であるとりあえず言うことができる。ここでは「文は一人の話し手が産出する」という暗黙の前提が破られている。ただし、これは結果的にそうなったのであって、この文が当初から二人で産出されるべく計画されていたと見ることはできない。それゆえ、重要なのは、この文が文頭発話時にBによって計画されたままの形では進行しなかったということの方である。「文は一人の話し手が産出する」という前提に照らせば、Bの発話が統語的に完了可能な点に達していない以上、AはB自身が完了可能な点まで発話を行うのを待つことが期待されるはずである。しかし実際には、上の二つの断片のように、人々はしばしば相手の発話が統語的な完了可能な点に達する前に発話を行うことがある。

では、相手の発話が統語的完了可能な点に達する前にそれを引き取ることは、どのような場合に行われるのだろうか。引き取り手は何を契機として、そのようなふるまいが許容されうると判断するのだろうか。会話分析の立場から英語話者の会話における引き取りを分析したラーナーは、大きく二種類の引き取りの契機を見いだした。このラーナーの知見は、その後いくつかの研究によって、日本語話者の引き取りに関しても基本的に妥当することが明らかにされている (Hayashi (1999), Lerner & Takagi (1999), 串田 (2002a), 森本 (2002))。

第一は、主として統語構造に由来する発話の予測可能性という契機である。「if X, then Y」「because X, Y」のような複文構造や、「not X, but Y」のような対照構造、「He said X」のような引用形式、「X, Y, and Z」のようなリスト形式が用いられて発話が生み出され始めた場合、聞き手にはその発話の産出中に「この発話の続きにはどんなタイプの要素が来るか」がしばしば予測可能となる。日本語の場合には、これらに加えて「主題+題述」という構造も重要であ

る。また、上記のような特定の統語構造に関わりなく、ひとつの文の末尾の統語要素は高い予測可能性を持つと考えられる。引き取りの多くは、上記のような統語構造の発話の最終要素や、ひとつの発話の末尾の要素において生じていることから、これらの予測可能性が引き取りの第一の契機であると考えられる。

第二は、発話産出上の特徴に関わるものである。話し手はしばしば発話中に、発話の「進行性の滞り」を見せることがある。会話の中の発話とは、流れる時間の中で一音一音、一語一語、その統語的な完了可能点に向けて順に開示されていく。この動きを発話の「進行性」と呼ぶなら、発話途中のポーズ、音の引き延ばし、「あの一」「ええと一」などを用いた言葉探し、語句の反復、笑いなどが生じるとき、その発話は「進行性の滞り」を見せるといえる。引き取りの多くは、こうした進行性の滞りが生じた直後に行われることが分かっている。進行性の滞りは、聞き手が発話の続きを言うべく参入することを正当化する理由を提供するものであり、これが第二の引き取りの契機であると考えられる³⁾。

より抽象度を上げて考えれば、これら二つの契機には共通の特徴がある。それは、いずれの契機も「話し手」と「文」とのあいだに何らかの乖離をもたらすということである。言語学や言語哲学において想定されている「話し手」とは、通常、ひとつの「文」を最後まで発話しきる者である。また、「文」とは通常、ただ一人の「話し手」によって発話されきるものである。「話し手」と「文」とは、互いに互いの外延を規定する形でピタリと重ね合わされて観念されている。

二つの契機は、このように重ね合わされた「話し手」と「文」とのあいだにそれぞれ異なった形で隙間を作り出す性質を持つ。第一に、統語的な予測可能性は、一人がある文を産出している途中で、その文の続きを聞き手にも予測可能にし、いわばその「文」を聞き手に対して「開かれた」ものにする。聞き手はその気になれば、自ら続きを発話することができ、こうしてその「文」は「話し手」の手を離れてしまう。つまり、統語的な予測可能性が高まるに連れて、その発話は「話し手」に「占有」されたものではなく、堅固に見えていた「話者性」にある種の「ゆらぎ」が生じる。

第二に、発話産出上の進行性の滞りは、別の形で「話し手」と「文」とを乖離させる。一般に、発話が産出されるとき、次の3つの役割が誰かによって担われる必要がある。1. 発話によって何ごとかを行おうという意図ないし計画を持つ

こと、2. その意図・計画を実現しうるような言語記号の配列を考えること、3. 配列された言語記号を音声として発すること、である⁴⁾。ふつう「話し手」とは、これら3つの役割をすべて一人で担う者として観念されている。しかしながら、われわれは会話の中でときに、言語記号の配列を考えたり、それを音声にして発したりすることに、一時的な困難を覚える。発話産出上の進行性の滞りとは、このような事態への総称に他ならない。このとき、上記3つの役割のあいだに乖離が生じ、話し手の「話者性」に「ゆらぎ」が生じる。そしてこのゆらぎによって、そこで生み出されようとしている「文」と「話し手」のあいだにやはり隙間が生じる。

要するに、引き取りとは、一人の話し手が産出中の発話に何らかの「話者性のゆらぎ」が観察されることを契機として、聞き手であった者が途中から「もう一人の話し手」として発話産出に参加するというやりとりの形式である。

2. 引き取りのあとの「うん」と「そう」

引き取りが生じるとき、話し手—聞き手という会話において自明視された関係が一時的にゆらぎ、「話し手」とは実は先に見たような3つの識別可能な役割の複合体であること、「話し手」と産出される「文」とは乖離しうるものであること、これらのことが顕在化する。それゆえ、引き取りが生じた「あと」で行われるやりとりは、何らかの形で、このような話者性のゆらぎが生じたことへの対処になっていると予想できる。つまりそこでは、ゆらいだ話者性の「再配分」をめぐる「交渉」が行われていると考えられる。引き取りのあとで用いられる「うん」と「そう」は、このような「話者性の交渉」に用いる二つの代替的な道具なのである。

少し先走りしすぎたようである。まずは、引き取りが生じたあとのやりとりがどのようなものになるかを、データに即してみていくことにしよう。さまざまな場面でビデオ収録した会話資料（詳細は本章末尾参照）から、引き取りが生じている部分を約80ケース抜き出して概観したところ、かなり多くのケースにおいて引き取りの直後に「うん」あるいは「そう」が用いられていることが分かった。これらの言葉を発する者は何らかの意味で相手の直前の発話を承認していると思

われるが、何がどのように承認されているのか。

引き取られ手の立場からすると、自分の発話計画が完遂されていない時点で、相手が統語的に連続する発話を行っているのが分かる。それゆえ引き取られ手は、「自分が計画していた続き」と「相手の口からでてきた続き」とを照合し、後者が前者と（ほぼ）合致するものかどうかを判断することが自然であろう。「うん」や「そう」はそのような判断の結果が表明されたものであると考えたくなる。

しかし、ことはそう単純ではない。なぜなら、「うん」や「そう」は引き取られ手が発するだけでなく、引き取り手も発するからである。私のデータ群には、次のような4通りのパターンのすべてが見られる。なお、以下でデータを提示するときには、そのときどきの分析で注目する部分に下線を引く。

パターンⅠ 引き取られ手の「そう」受け

【来る直前だもんね】

→ 2B: そうだって(.) あたしあれやったのさー (0.6)

⇒ 3A: 来る直前だもんね

4B: そうそうそう (0.7) このー (0.7) あと (0.4) ぐらい?

パターンⅡ 引き取られ手の「うん」受け

【食べちゃったねー】

→ 5B: 結局このトマトほとんど (0.4) [食べたねー [うん (0.7)

⇒ 6A: [食べちゃったねー]

7B: まるまる

パターンⅢ 引き取り手の「そう」受け

【うんきせ】

[親族の食事場面。以前にAがBの家を訪問したときに「豆ご飯」をともに食べたことが話題となっている。]

→ 9B : ちょうどえんどうえんどう豆のねー [出始めでね [ー
 ⇒10A : [うんきせ(.) [そう=
 11 = そう [そう 一番おいしいときやったねー
 12B : [うん

パターンⅣ 引き取り手の「うん」受け

【食べれなくなる】

〔3人の学生の会話場面。Aが最近食が細くなったことが話題となっている。〕

→ 9B : あたしも入らないよストレスーが

→10 (0.5) たまるーとぜんぜん(.) ご [はんなんぞいらん
 ⇒11A : [食べれなくなる(.) うん

引き取った者がこれらの言葉を用いることもあるということは、まず、これらの言葉を「引き取られた者が相手の引き取り発話を承認する」という働きだけに注目して考えることはできないことを示している。では、このようなヴァリエーションをどう考えたらいいだろうか。

上にあげた4つのケースには、一つだけ明白な共通性がある。それは、引き取りが開始されて以降の時点において、先に黙った（引き取りが開始されたときにすでに黙っていた、あるいは、開始されてから先に発話をやめた）方の者が「うん」や「そう」を用いているということである。この規則性は、この4ケースだけでなく、私の手元にある引き取りケースのすべてに当てはまる。そこでわれわれは、次のような最初の観察に到達する。

《観察1》

会話の中で引き取りが行われ、引き取りの直後に「うん」または「そう」が用いられているとき、それを用いているのは、引き取りが開始されて以降の時点において最初に黙った方の者である。

会話中のオーバーラップに関する詳細な研究で知られるジェファーソンは、《観察1》とよく似たことを観察している。彼女によれば、二人の発話が同時に

開始され、二人がオーバーラップする形でターンをとった場合、その次のターンをとるのは必ず先に発話をやめた方の者である。たとえば次の例を参照。

【Jefferson(1973:87)より】

Agnes: [That's about a:ll

Guy : [What else

→Guy :The hat

このことは、オーバーラップした二人の発話の順序に関して「先に発話をやめた方の発話が先だと見なされる」ということだとジェファースンは解釈する(Jefferson(1973))。つまり人々は、オーバーラップした二つの発話に関して「どちらが先か」を決めるときに、「どちらが先に発話を開始したか」ではなく「どちらが先に発話をやめたか」を参照しているというのである。

この解釈を援用するなら、引き取りが開始されて以降の発話産出において先にやめた方の者が「うん」受けや「そう」受けをすることは、直前のやりとりに関して「自分の発話が先であり相手の発話が後である」という時間的順序関係を割り当てての手続きだと考えることができる⁵⁾。つまり、これは何らかの意味で相手の発話を「自分の発話への反応」と見なすことによって、双方の発話に相互行為上の一定の地位を与える手続きなのである。このような手続きがとられるならば、双方の発話は相互行為の進行に対して一定の貢献をしたことが公然化され、オーバーラップしたからといってどちらも「なかったこと」にはならない。

3. 「そう」「うん」に先立つやりとりの特徴

先に発話をやめた者が「うん」「そう」で受けることにより、双方の発話に相互行為上の一定の地位が割り当てられる。では、「うん」の場合と「そう」の場合とで、割り当てられる地位はどのように異なるのか。これを考えるためには、「うん」が用いられる場合と「そう」が用いられる場合とで、前後のやりとりになにか系統的な違いがあるかどうかを見なければならない。手元のデータ群を概観すると、いくつかの傾向に気づく。まずは「そう」に先立つやりとりの特徴から